川を活かしたまちづくり事業の比較分析に関する研究

福岡大学工学部　学生員○高辻伸彰　　福岡大学工学部　正会員　渡辺亮一
福岡大学工学部　正会員　山崎惟義　　福岡大学大学院　学生員　平塚祐介

1. はじめに

昨年 12 月末に小泉首相は、現在、東京・日本橋の上に架かる首都高速道を別の場所に移し、日本橋を中心とした川に「青空を取り戻そう」という計画を打ち出した。これは、“まちのうら”になってしまった川[1)]やその景観の魅力が注目されている象徴的な出来事である。平成 15 年に自然再生推進法が施行され、過去に損なわれた自然環境を再生していこうと言う機運が高まっているが、この法律では地域住民の合意形成がなされる必要があるとされている。川を再生して行こうとした場合、川の周辺に住む住民の合意を形成していく過程で、川の魅力を伝え、関心を持たせると同時に地域住民の自主的な活動を促すことが重要となると考える。また、魅力的な河川を再生するための事業を推進して行くには、川を活かしたまちづくりは非常に有効な手段と考えられる。しかし、実際に福岡市内の川を活かしたまちづくりを企画段階から携わった際に、いまだ行政主体で地域住民からの自主的な参加というのは、あまり浸透してない印象を受けた。本研究では、福岡市で先進的な事例である早良区のふれあい室見川と今年初めて開催された博多区の那珂川フェスタに企画から参加した強みを活かし、主催者側から見た川を活かしたまちづくり事業の問題点と改善策を探っていくことにする。

2. 対象イベントの概要

2. 1.　ふれあい室見川（写真 1）[3)]

ふれあい室見川は早良区のシンボルである「室見川」を活かして、市民と行政の協働による市民手づくり事業である。当イベントは毎年夏に開催され、今年で 4 回目を迎える。イベントの企画から市民が関わり、4 回のスタッフミーティングを行った。当日は、午前中に地域で活動されている各団体の催し物（凧作り・石鹸作りなど）を楽しむ「むろみんフェア」、午後から川底でドッヂボールなどを楽しむ「むろみんピック」が催される。

写真 1　ふれあい室見川 2005

2. 2　那珂川フェスタ（写真 2）[4)]

那珂川フェスタのイベント企画は 2 回のワークショップで市民と行政の協働で行われた。その内容は、プレイベントで那珂川上流部の水生生物や魚を観察する那珂川探検隊、メインイベントでは、那珂川の上流、中流、下流部の魚など展示したミニ水族館、植物で染物体験や葦でペンを作る自然素材工作教室、那珂川の今と昔を伝える写真展などが催された。

写真 2　那珂川フェスタ

3. 研究手法

3. 1　現地調査・ヒアリング調査

川を活かしたまちづくり（川づくり）事業であるふれあい室見川と那珂川フェスタの企画段階から携わり、ワークショップ等で市民を始め様々の人々との意見交換や行政の方に対して、ヒアリング調査を行った。

3. 2　アンケート調査

平成 17 年度ふれあい室見川 2005、[5)]那珂川フェスタで来場者に対してアンケート調査を行い、来場者の属性やまちづくり（川づくり）イベントに対する意識把握を行った。

4. 結果及び考察

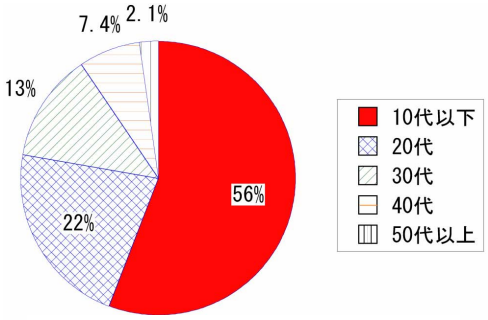
両イベントを比較すると（表 1)、ふれあい室見川は、地域で活動されている団体の参加によってイベント数が充実し、工夫された広報活動を行った結果、多くの来場者が訪れ、より長くその場所で楽しむができた。

一方、那珂川フェスタは、来場者からイベント数が少ないという意見が出され、またイベントの内容からも長時間人々を留めておくことが困難であった。そのため、散歩などでたまたま通りかかった人々もすぐ帰ってしまった。次に、ふれあい室見川と那珂川フェスタの来場者年齢別構成（図1）を比較すると、前者の方が10代以下の参加が後者に比べて2倍以上の割合を占め、特に、小学生の参加が多いことが分かる。この要因として、昨年ふれあい室見川に参加して、興味を持った小学生が今年から企画に携わったこと、イベントに小学生を対象としたむろみんドッヂという競技等が行われていることが挙げられる。したがって、ふれあい室見川は人を集めることに関しては成功している事業と言える。しかし、表1に示したように、一部が競技化してしまっていることから、本当の良さが伝わってないという問題が挙げられる。その点、那珂川フェスタのイベントは、川を活かし、その魅力を伝え、自然を感じてもらえるような努力をしている。そのため、幅広い年齢層の方に満足してもらっている点が評価できる。

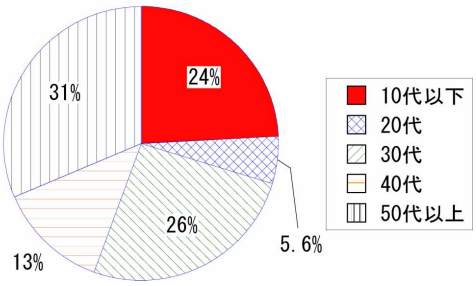
また、那珂川フェスタで、「今後、このようなイベントの企画から参加したいか（図2）」と尋ねたところ、積極的に参加したいと答えた人は3割に過ぎず、イベントには参加するが、住民自ら企画し、実行するような意識はまだ低いことも分かった。これは、ふれあい室見川も挙げられる問題点であると考えられる。

表1 ふれあい室見川と那珂川フェスタのイベント内容の比較

	ふれあい室見川	那珂川フェスタ
目的	・市民、行政による協働→魅力あるまちづくり ・人と人とのふれあいを育み、深める ・ふるさと・郷土への愛着を育む ・ふれあいの精神を子ども達に継承	・市民、行政による協働 ・親しみやすい川づくり ・流域住民の自主的活動を促す
良い点	・地域で活動されている団体の参加 （凧作り・石鹸作り等、計16団体） ・干潮時に川底が現れ、そこを舞台にイベントが行われる ・多くの市民を集めることができる ・特に、小学生の参加が多く、賑わいがある ・飲食関係の販売がある	・川の魅力を伝えるイベント内容 ・自然にふれあい、学ぶことができる ・那珂川の今と昔を伝えることで、川の環境を知ってもらうことができる ・誰もが気軽に参加できる ・来場者の年齢層が幅広い
改善点	・川の魅力を十分に伝えきれない ・イベントの参加年齢に偏りがある ・一部のイベントで競技化してしまっている	・川に入ることができない ・集客の工夫、PR不足 ・長時間滞在しにくい ・地域で活動されている団体の参加がない



ふれあい室見川アンケート結果（N=95人）



那珂川フェスタアンケート結果（N=54人）

図1　年齢別構成の比較

5. まとめ

今回、ふれあい室見川と那珂川フェスタを比較、検討したところ次のような問題点が明らかになった。まず、一つ目は川の魅力がはっきり伝わっていないこと、二つ目は、住民自ら企画し、実行する意識が低いことが挙げられる。更に、人を集めることに関しては、早良区の事業のようなイベントは非常に有効であるが、事業の目的でもあるふれあいを育んでいるとは言えない。そのため、那珂川フェスタのように川の魅力を伝え、自然とふれあえるような要素をイベントに組み合わせると効果があると考えられる。今後更に魅力的な川づくりが福岡市で行われるよう、両事業に積極的に関わっていきたいと考えている。

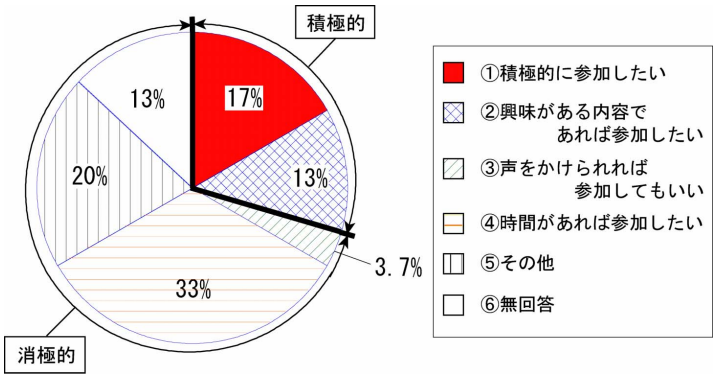


図2　企画スタッフについて（那珂川フェスタ：N=54人）

参考文献　1）樋口明彦+川からのまちづくり研究会：川づくりからまちづくり，学芸出版社，2003．2）平塚祐介：室見川を活かした住民参加型のまちづくりに関する研究，福岡大学工学部卒業論文，2005．3）さわら魅力づくり推進委員会編：プロジェクトMuromi-平成16年度早良区・室見川ふれあい事業報告書-，2005．4）博多区役所総務部企画課：「那珂川フェスタ」企画ワークショップニュース1～3号，2005．　5）パシフィックコンサルタンツ（株）：ふれあい室見川来場者アンケート結果，2005．